

# I 六号病室 (チェーホフ)

岩波文庫 湯浅芳子 訳

病院の中庭にある別棟は、古く朽ち果てそうな代物である。そこには管理人のニキータのほか5人の患者がおり、彼らの古い患者衣や履きふるした靴が山とつまれていた。その木造の壁は汚らしい空色のペンキが塗られ、煙突は粗末な農夫の小屋と同じようにすすけていた。いまここにいるのは5人の人物である。

①廊下から最初の部屋にいるのは、口ひげをたくわえ、今にも泣きそうな目をした、**背の高いやせ細った男**だった。彼はコンコン咳をしているのできつと結核にかかっているのだろう。次に、②その隣には、時々口笛を吹く**20年前は帽子工場の経営者**だった。ユダヤ人で名をモイセイカという。彼は往来へ出ていくのは自由となっている。だが、ときどき跣足ででかけ、人から1コペイカももらおうとする。クヴァスやパンをせがむこともある。その隣は、③中風患者で、イワン・ドミートリッチ・**グローモフ**という。もと**12等級の執達吏**で身分は貴族だった。彼は被害妄想がよく出る。平生は苦虫をかみつぶしたような渋面をさらしている。彼のおいたちを話すところだ。――父と兄セルゲイと一緒に暮らしていたが、父親が公文書偽造と公金横領で起訴されてから運につきはなされ、それからチフスで死亡。イワンはペテルブルグの学生だったイワンはアルバイトで稼いで母親に仕送りをしていた。そんな塩梅で、食うや食わずの生活をし、やっと執達吏になれた。彼は高尚な趣味はなく、生活も荒れ、暴力、放蕩、偽善は当たり前だった。もちろん、恋なんてしたことがなかった。本をよく読み、批判精神が旺盛で神経がときどき過敏になる。彼は一度町で二人の囚人と四人の護送兵を見たことがある。そのとき自分もあなるのではないかと思ったことがあった。そのまえに何かの廉で謙虚されるだろう。この中庭の人たちはスパイ探偵だろうと始終想い、不眠症になっている。そんなことから人を避けるようになった。以前よく本を読んでいたが、この頃は記憶も弱りだした。春、ある老婆の死体が見つかったことがあった。彼は自分が殺したのではないかと思われるのをさけるために、急にニコニコしだした。そしてある穴倉に身をかくした。病棟にはニキータしか来ない。医師のアンドレイ・エフィームイチも来ない。そんなところへ、ある日暖炉職人が修繕にやってきたが、それを見た彼は、暴力が追っかけてくるように思え興奮した。人々が彼をおさえつけ、医師は彼に冷湿布をした。彼は悲しげに頭をふり、狂ったようになった。今は六号病室に移っている。

イワンの反対隣りには、④**脂肪太りした百姓男**がいた。一切の思考を停止しており、それに腹をたてるニキータはその男を拳固でよく殴る。最後は、⑤**以前郵便局の選別係**をしていた男。ずるそうな顔をした小柄な痩せ型男である。彼はなにか大事な秘密を持っているようで、枕の下には何かがある。彼はグローモフに、「ぼくはスタニスラフ勲章に推薦されたよ、祝ってください」といったことがある。「そのうちスウェーデンの”北極星”をもらうことになるでしょう」とも言った。彼ら五人のうち、③グローモフと④脂肪太りの百姓男を除いた三人は顔を洗った後は患者衣でふく。彼らの食事は玉菜汁(シチ)と粥(カーシャ)だった。

二か月に一度床屋のセミヨン・ラザリチがやってくる。この男以外には誰もこないのだが、このごろ、六号病室を医師がたずねるようになったらしいという噂が広まった。医師はアンドレイ・エフィームイチ・ラーギンといった。誠実ではあるが、どこか行動力にかけるところがあった。

親に勧められて、不本意になった。だから患者や付添婦らに強くせまられると、病院に来なくなることもある。そんな医師と馬があうのは、郵便局長のミハイル・イワーヌイチだ。彼はもともと裕福な地主だったが、零落して今日のようになっている。医員補にセルゲイ・セルゲイイチというのがこれは精励恪勤で、人物よくアンドレイを補佐している。ミハイルの来ないときはアンドレイは本を読んでいるが、こんなときは、医務のことは放ったらかしになっている。管理人のニキータが患者らを手荒にあつかっていると、患者の②モイセイカが町でどんなことをしよう、馬耳東風だった。そもそもこの町は鉄道から200キロも離れていて、雰囲気はよどんだようなもので人もそう活気のあるものではない。ある春の日、アンドレイの助手として医師のエフゲーニー・フョードルイチ・ホーボトフというのが赴任してきた。彼には乳飲みみずつきの料理女がついていた。今日、モイセイカがアンドレイのところへやってきておしゃべりをしてしたが、モイセイカ自身は、アンドレイのことを自分を探ろうとしているスパイだと想っている。今日の話では、ギリシャ哲学ディオゲネスや、ローマのマルクス・アウレリウスのことを持ち出した。それはいつしか空虚な哲学問答になっていったが――アンドレイが最後に言ったのは、「われわれを興奮させている世界と言ったって、それがどんなにつまらないものかが分かるでしょう。人生の悟りへと努力することが必要だ」だった。だがモイセイカはそれに反論した。「ぼくが分かるのは、『神は血と神経でぼくを創ったということだけだ』(同 p135) まあそんなことを語り合って、モイセイカは自分の部屋にもどっていった。だがこの問答で、アンドレイはモイセイカから多分の感銘をうけた。アンドレイはそれから毎日別棟に通いだした。だがアンドレイの日参にイワンは馴染めず、敵意を抱きはじめた。

こんな日々が続くと、老医師のアンドレイは、まわりに秘密めいたもののあるのに気づいた。彼らはひそひそ話をよくするようになった。監督の娘でマーシャというのは、アンドレイが近づく逃げ出す始末だった。

八月になって、アンドレイは市長から呼び出しがあった。学校関係者や自治会議員らもいた。一人ポーランドから来た医師もいた。用件は本館の薬局が手狭なので、別館に移そうかというものだった。自治会員らは声高に組織論や権限がどうだといった議論をしていたが、やがて、話の流れが移って、この町の退屈さという点にかわった。アンドレイが発言を求められたとき、彼は、『市民たちが自分の生命のエネルギーを、自分の心と知力を、カルタや無駄口に費やして、興味ふかい談話や読書に時間を過すだけの能がなく、またそれを欲しない、知力が与えてくれるたのしみを楽しむことを欲しない、これはどんなに残念か、どんなに深く残念なことであるか』同 p 145 とゆっくり語った。これで今日の協議会は終わってしまった。この空気を讀んだ郵便局長はアンドレイに、休暇をとって、新しい空気を吸いに出かけようと誘った。アンドレイはそれを謝した。郵便局長は、ワルシャへ旅に出ようと誘うのだった。

一週間たって、アンドレイは辞表提出の勧告を受けた。そこで、局長はさっそく彼と旅にでた。駅まで二昼夜かかった。旅にあつて、この郵便局長はよくしゃべった。景色をみては、この無秩序な開拓が我が国の凶作の原因だ、と主張するのだが、その語り口は、町にいるときと同じで威圧的で、少々荒々しかった。アンドレイをうんざりした。――いったいどちらが狂人だろうか。モスクワでは、赤の広場の入口にあるイーヴェルスカヤに出かけ礼拝した。ここでもミハイル局長は、

騒々しかった。しまいにはアンドレイは腹立たしさをおぼえた。やっと独りになったとき、幸福を感じた。ペテルブルグでも同じだった。ミハイルは次にワルシャワを目指したが、アンドレイは、なんのためにワルシャワに行くのかと問うた。でも結局はそこに行った。ミハイルは、旧知の場所を訪ねては感慨にふけた。ある晩帰ってこなかったが、どうやらギャンブルで大負けをしたようで、次の日、アンドレイの金で元を取り戻したようだ。こんなことで騒ぎまわっている男だ。やがて二人は町に戻った。いまとなってはアンドレイは自分の家を探さなければならなかった。全財産は86ルーブリしかなかった。ミハイルはその現実を知ると泣き出し、アンドレイを抱きしめた。

アンドレイはいまは三つ窓のある小さな家に、自分の家政婦ダーリュシカや、家主の家族らと一緒に住んでいる。女主人には情夫がいてこれが時々やってくるが、それが荒々しい酔いどれ男ときてダーリュシカは怖いほどだ。そんなとき、アンドレイは、彼ら家族の子どもらをひきとって慰めるのだった。ところで、いまや病院勤務をしないアンドレイは、本を読むのが日課になっており、そのことで収入もなくなっていた。女主人からはビール代32ルーブリを借りているありさま。いまさらにあの旅行で1000ルーブルを使ったのが後悔された。アンドレイは、その後もミハイルやホーボトフがやってきて他愛のない話を聞かされていることなんか、百万年後の地球を思ってみるのと同じく、どうでもいいことだった。アンドレイはただ、「ワルシャワの借金はすぐ返しますよ」という思いのほか、だんだんと心が高ぶった。「二人ともとっとと出ていけ！」と叫んだ。彼らが去ったあと、アンドレイは熱病のようにふるえながら長椅子に寝ると、長い間、「にぶい人間どもが！ 愚かな人間どもが」と繰り返していた。その後、ミハイルはアンドレイのところに来て、病院に入院したほうがいいと言ってくれた。アンドレイはミハイルの心配りに感動したが、——病院の実態を知っているアンドレイ——としては、治療なんてあれは欺瞞です！私の病気はただ、20年を通じて町じゅうにたったひとりの賢い人間を発見した、ということにありますと語った。

同じ日の夕方、半シューバに丈の高い長靴をはいたホーボトフが、アンドレイのところに来て、「お招きにきました」と言ったとき、アンドレイは「あなたの病人はどこにいますか？」と聞いた。ホーボトフは「わたしの病院にいます」と言って、アンドレイともども別棟の方に入った。もう黄昏になっていた。イワンは寝床にいて、中風患者は動かずに座っていた。太った百姓男と元屑屋の男は静かに眠っていた。そこへ、ニキータが患者衣と肌着を持ってきて、「どうぞ着替えてください、大先生」と声をかけた。「大丈夫ですよ、きっと全快されますよ」アンドレイはすぐさますべてを理解した。患者衣は燻製のおいがした。アンドレイは、「これは何かの間違いだ。合点がいかない、思い違いがある」と言い出した。それを見ていた患者のイワンが、唾を吐いて横になった。モイセイカはやってきて、「一文おくれ！」と言った。

アンドレイは格子窓から外を眺めていた。真っ赤な月がのぼってきて向こうに白い塀の家が見えた。それは監獄だった。塀の上にはくぎがでていた。アンドレイがドアを開けると、ニキータが飛んできて、もう寝る時間です、と言った。アンドレイが「私は用事があるのだ」と言っても、ニキータは「騒動を起こさないでください」というばかり。「これは暴力だ、専横だ」というと、イ

ワンもそれに和した。アンドレイがあまりに騒ぐので、ニキータがやってきて、アンドレイの顔を殴った。イワンも殴られた。アンドレイは喘ぎながらシャツを引っ張り、引き裂いて、正気を失って寝台に倒れ込んだ。あくる日、アンドレイは耳鳴りがして、頭が痛くなった。夕方になってアンドレイは卒中で亡くなった。男どもがきて、アンドレイの手足をとり、小礼拝堂へ運んだ。その二日後、アンドレイは葬られた。それに居合わせたのは、ミハイルとダーリュシカだけだった。

## II 千一夜物語 (339～346夜) 青銅の町の綺談

岩波文庫 豊島与志雄・渡辺一夫・佐藤正彰・岡部正孝 訳

ダマスカスのウマイヤ朝の教王はアブドル・マリク・ベン・マルワーンといった。彼は、国内の賢者たちと、王様のスレイマン・ベン・ダーウドのことや、その他数々の美德のことや、さらに寂寞世界の野獣や大気に群がる鬼神やさらに海原や地下の魔神のことなんかについて語り合うのが好きだった。ある日、教王は、古い昔の壺のことを思い出した。それは悪魔のような形をした黒い煙がなかに収められているものだが、それには鬼神が封じ込められているということで知られていた。そしてその壺は、マグレブの荒海の底に投げこまれていると言われているのだが、それは「青銅の町」というところにある。教王アブドル・マリクは、その町について強い好奇心をおぼえた。そこで、マグレブの太守を呼び、それを持ってくるように、と仰せになった。そこで、実際のところ、総督ムーサ公が、その任に当たった。

### 【340夜】

総督ムーサ公は、長老と教王の使者をとめない、千頭の駱駝で食料を、千頭の駱駝で水を積んで、砂漠の旅に出た。何日かののち、輝くような雲の輝きを見た。だんだん近づいて見ると、それは周囲は4千歩ほどありそうな建物だった。幾千羽の鳥がはばたいていた。その正面まで近づいとき、正面の扉に、イオニア語で、「かつての支配者は影のごとく散ってしまった、死のように、わらくずのように、消え失せた」という意味だった。そしてその建物の主は、クーシュ・ベン・シャッタード・ベン・アッタードと名を記していた。そして一行はこの建物の中に足を踏み入れた。皆は確かに得体の知れない空間にいることに薄気味悪さをおぼえたが、ここはこれまでにして、青銅の町に行きつくのを急いだ。

### 【341夜】

太陽の光芒がまぶしく放射している中、はるか遠くの高い台座のうえの立つ騎馬武者の姿が見えた。彼は槍の穂先をもって構えていた。一行が、青銅の町の方角を聞くと、正確な位置を教えてくれた。それは今まで思い込んでいる町のイメージから大分変わっていたようです。やがて、その正しさを証明するかのよう、大きな岩があった。だが、その岩は何かの生き物のような形をしている。だがその下半身は岩の下半分の取り込まれたような形をしていた。確かにその上半身を見ると、本体としては、翼があって、手が4本、翼があるようだ。うち2本は獅子の脚、驢馬のような頭髪だった。その生き物は我々が近づいてくるのを知り、身悶えしながら、鎖製のいましめを切ろうとしたが、それはできなかった。ただ、二つの目が爛々とたけり狂うように眼光を放っていた。すると一行の前に魔神の後裔の一人、鬼神ダエーシュ・ベン・アラエマーシュ(俺)という、青銅の町の守護女神の番人という人物が現れ、俺の主人は「海原の王」だと言ったが、像のうち胴体部分は男だ。その男は、



「俺はスレイマンの軍団長だった」という。ところで、「海原の王」に美しい娘がいて、魔神の主スレイマンが彼女を妃の一人に欲しいと求めてきたのだが、「海原の王」はそれを拒否した。

【342夜】

そこで海原の王は大臣たちと相談した。大臣は、俺(守護神像としての俺)に相談してきた。そこで出た結論は徹底抗戦ということになり、スレイマンから遣わされてきた使者を棍棒で殴りつけた。するとたちまち戦端が開かれ、対人間戦士はアサフ・ベン・バルキアに任せ、対6千万の魔神集団は鬼神の王、ドムリヤートにゆだねられた。それぞれ大軍の襲来で天空は翼の羽ばたきや雄たけびや喚き声が起り、震撼した。ところがその戦さは、俺たち(海原の王の軍)は仇敵の魔神や人間や獣や鳥どもに取り囲まれ、三ヶ月後に負けた。守護神の俺は世の果てが来るまでこの黒い柱につながれているという刑をうけることになった。そして俺の配下の魔神は、煙に姿を変えられてしまい、銅の壺に閉じ込められてしまった。その壺はスレイマンの玉璽をもって封印され、青銅の町の城壁に打ち寄せる海原の底深くに投げ込まれてしまった。胴体男が柱から解き放たれようと身をもがいたとき、ムーサ公はこの町に留まっているのはまずいと考え、この地を離れた。でも、はるか向こうに青銅の町がみえてきた。あくる日、一行の眼前に青銅の城壁が見えていた。さてこの町に入るには用心が何となく感じられた。ムーサ公は、長老と従者ターリブにを従え高い山に登り、そこから中をうかがった。

【343夜】

月が輝きだしてから中がよくわかった。それは墓場の中の静けさのようであった。像はあってもじっと固まったようにしか見えなかった。ただ動くものは、吸血鳥ばかりだった。山から下りた3人は城壁の下で、イオニア文字4つが記されていたので、長老はそれを読み、解説した、—— ①死は近し、将来に望みを託すな、②この世は東の間の滞在、仮の宿、③主の御前の裁きの日を思え、④死は汝が肩の上にある——ムーサ公はこれを読んで「死なねばならないのなら、なぜ生まれるのだ」と考え、部下に城壁の上までいける梯子をつくらせた。

【344夜】

梯子ができてから何人かが城の中に入っていくと、密やかな仕掛けに密やかな仕儀を施した秘密の階段が現れた。その中を進んでいくと警護の者がいたが、一行にはまるでそれが見えないかのように無反応だった。一行は次に市場の入り口にやってきた。市場の人たちは、別段彼ら一行に反応しなかった。回廊の兵士たちもそうだった。

【345夜】

回廊を歩き続けるとまたもイオニア語の銘板があった。長老が読むと、——この世の快樂に身をゆだねることなかれ、敬虔なる心を持って、死を恐れよ——とあった。一行はこれらの言葉に感激し、それらを羊皮紙に写し取った。やがて一行は美しい泉水のながれる、心が十分に休まる天幕の下にやってきた。溝の上に渡された床は涼やかで心地よく、宝石がちりばめられていた。いくつもの部屋をぬけていくと、大きな扉があり、扉は象牙や黒檀など精巧な寄木細工でできていた。その中へ入ると。あらゆる宝飾品でいっぱいだった。一行が聖堂の階段を上っていくと、そこに寝台があり、一人の乙女がいた。彼女は目鼻立ちの静けさを伴っており、頭髮の冠、髪飾りは黄金色だった。そこには銘板があり、それによれば、彼女はアマレク族の王の娘で夕

モールといった。またその銘板には、「この宝飾品は好きなように持って帰ってよいが、この姫に手をかけてはならぬ」とあった。ムーサは、今更のようにこの場所から早く退去し、銅の壺を見つけなければならないと言った。

【346夜】

だが、従者ターリブは、乙女のあまりの美しさに、彼女をダマスクスの教王に献上してはとムーサ公に進言したが、公はいや触れてはならぬと言った。それでもターリブは彼女を抱え込もうとした。このとき彼女の背後にいた奴隷がターリブを斬り殺した。危険を察知したムーサ公は、すぐさまこの地を去った。彼はそもそも教王アブドル・マリク・ベン・マルワーンの命をうけて、ここへ秘められた壺を求めにきたものだから、こんな厄介ごとに首を突っ込んでいてはならないことはよく承知していたのだ。ムーサ公はそんなとき海岸で一人の老人を見かけた。ムーサ公はその老人に、あの青銅の町の不思議について教えて欲しいというと、老人は、「あの壺は栓をあける前に、外側から敲いて、中の鬼神に、アラへへの忠誠の証を建てさせることが大事じゃ」と教えた。それはスレイマンに叛逆した過ちを償わせる意味をもっていた。老人は、彼の持っていたスレイマンの玉璽で封印された12個の壺と海原の娘二人を、ムーサ公に渡した。ところでこの二人の娘の下半身は魚だった。こうやって教えてくれた老人とその仲間の漁師のために、彼らをいっしょにダマスクスへと連れて帰った。そして教王アブドル・マリクに帰着報告をした。教王はその冒険談を聞き、感嘆した。そしてその12個の壺を一つずつ開けた。確かにそのたびごとに濃い煙がたち恐ろしい鬼神が現れたが、教王の足もとにひれふし、叛逆の過ちを赦したまえと叫んだ。そしてやがては空気中に消えてしまった。教王は海原の二人の娘に感嘆し、すぐさま泉水に入れてやったが、体が弱っていたとみえ、間もなく亡くなってしまった。ムーサ公は、その後エルサレムに引退した。

### Ⅲ ルンペルシュティルツヘン ～グリム童話～

福音館書店 ホフマン編・画 大塚勇三 訳 II

ある国に粉屋がいた。粉屋には美しい娘がいて、粉屋はそれをたいそう自慢にしていた。そこで、粉屋はこんなことをしゃべった、——自分の娘は、麦藁から金をつむぎだすことができる」と。そのことを国の王様が聞き、粉屋の娘を呼び出し、糸車と麦藁のいっぴいつまった小屋のなかに娘を閉じ込めた。そして、さあこれらを明日の朝までに金に変えよ、できなければ死刑にする、とおどした。閉じ込められた娘が、小屋の中で泣いていると、そこへ小さな男が入ってきて、泣いているわけを訊いた。娘はありのままに話したところ、その男は「なら、私がやってやろう。その代わりに何をくれる？」と言ってきた。娘は自分の指輪をやるという条件で、その仕事を引きうけてもらった。その男が、糸車をブン、ブン、ブンとまわすと、何と金糸が糸車に巻きついていった。その後、どんどん糸車をまわすと、やがて小屋いっぴいにあった麦藁はすべて金糸に変わった。翌朝、王様がこれを見ると驚き、それから欲がもっと出てきて、王様は別の大きな部屋に娘をつれていき、その部屋の麦藁を金に変えてみよ、と要求した。その晩、娘が途方にくれていると、また昨日の小さな男がやってきて、仕事を請合おうと言い出した。そして今度は何をくれる？」

と言うので、娘は自分の首飾りをやると約束した。そして翌日また同じように、王様がやってきて、その仕事ぶりに驚き感心した。そして王様は、またも大きな部屋に閉じ込めて同じことを要求した。そしてそれができると、死刑にする代わりに、お前を妃として迎えようと言った。またその晩、例の小さな男がやってきて、仕事を引きうけてくれた。このとき、男は娘に、王様との間で子どもが生まれるとその子を欲しいと言い出した。娘はすっかり疲れており、まともに考えることができないでいた。そしてそのことを約束した。

ある日、糸車には金糸がいっぱいになり、王様はすっかり満足顔。そして娘との結婚式が挙げられた。それから1年後、二人の間に子どもが生まれた。すると、あの小さな男がまた妃の前にあらわれ、子ども引きわたしを要求した。だが、王妃はこれには従わなかった。彼女は、その晩、その男に連れていかないと懇願した。すると男はゆずってくれて、「これから三日のうちにわしの名前を言い当てたなら、子どもを連れていかないでおこう」と約束してくれた。

それから王妃は兵士たちを全国にくまなく派遣して、名前を調べさせた。それをことごとく男に言ってみたが、男はせせら笑っていた。そのうちの一人の兵士が、あるところで、妙な歌が歌われているのを聞いた。それは、「今日はパン焼き、明日は酒造り、あさっては妃の子どもをもらってくる。俺の名前はルンペルスティグツヘン、だが誰も知らない——」というものだった。兵士はこれだと思い、さっそく王妃に報告した。三日目、小さな男は、時間の到来をまっていた。王妃が当たりそうにもない名前を列挙する中で、いよいよ「ルンペルスティグツヘン」というと、いままでせせら笑っていた男は、急に顔をしかめ、「悪魔が教えたんだ、悪魔が教えたんだ」と悔しそうな表情で叫び、道に出たところで、右足を大きくあげて、地面にむかって踏み落とした。すると右足は地面にのめりこんだ。するとそこで、両手で左足を引っつかんでひろげた。すると、小さな男の体は股裂けとなり、男は死んでしまった。

## IV 酔いどれ船 (Le Bateau ivre) アルチュール・ランボー (仏 1871年)

新潮文庫 堀口大学 訳

もと欧米間を行き来した、今や時化で漂流物となってしまった貨物船(=私)の、遭難から打ち果てた姿となるまでのシーンを描いている。その背景には、未知のおどろおどろしい、それでいて自然の華麗、神秘、荘厳なさまが描かれている。だが、私の周辺は死ばかりが浮かび上がり、底知れぬ果てに消えてゆく。私は私で自己制御ができない、“酔いどれ”状態のなか、呻吟するのみだ。——パリ・コミューンの失敗に失望した17歳のランボーが、その心の残照に触れつつ(囚人船:パリ・コミューン時の囚人を南太平洋のニューカレドニア島に移送するための船)、それまでの詩のスタイルを革命的に一変させた(心的表現を外界の、しかも途轍もなく大きな自然を以って表現した)新しい試み。ヴェルレーヌを驚嘆させた。——

非情の河を下る途中で、船曳きたちの力が感じられなくなった。それはネイティブが弓で射殺したからだ。船はフランドルの小麦やイギリスの綿をアメリカ(フロリダ)に運んでいた。狂

おしい潮騒の中を渾沌に向かっていた。嵐の中を幾夜も、私の身はまるでコルク栓よりも軽く宙に舞った。海水はリンゴ水よりも甘美に泡立ったかと思ったら、一気に船乗りの嘔吐や樽詰めワインのしみを洗い去り、果ては舵や錨をも引きちぎっていった。

私は乳色の星の光の中、大海原の詩を聞きながら、碧さ弥(いや)増す空を見上げた。時折り蒼く光る水辺に水死人の骸が流れていった。真っ赤な太陽のもとで褐色に染まって行く海原では、恋情の赤い痣を思い出させるような思いが、酒よりも強く堅琴よりも強く響いていく。稲妻のせいで崩れ落ちる大空、竜巻、逆立つ潮津波を私は知っている。夕暮れを、鳩の舞い上がるさまに似た暁を、人が見たこともないような現象を。神秘に怖れに染まった夕日が、董色にたなびきながら、ギリシャ悲劇の俳優の裳のような光を発し、髪のように流れていった。

私は見た。雲母まばゆく光る緑の夜が、青い海の瞳に口づけをすると、生気が湧き立ち、青や黄や燐光が輝き出す。私は興奮した牛の群れや暗礁に襲いかかる大浪を幾月も追いかけた。マリアはまったく術がなかった。陸(フロリダ)にあがると人肌色をした豹の目が花の中に隠れ、七色の虹が立ち、青い羊の群れが行き交っている。沼の大きな魚鱗(やな)には巨怪獣(レバイアサン)がかかかっており、水は滝のように深淵に落ち込んでいた。

氷河、銀の太陽、螺鈿の波、熾火(おきび)の空、褐色の入江には破船があり、大蛇がうごめき、虫がそれに襲い掛かっていた。異様な臭いがただよっていた。しかし、一方で黄金の魚が波間に踊り、時に順風が私に翼をくれた。熱帯や極北をめぐるこの殉教者(私)に、すすり泣く海が揺りかごをくれ、吸盤に似た花を私にかざしてくれた。私はそれにひざまずいた。

甲板上では鳥たちがやかましく争い糞をまき散らしていた。私の細綱を離れて流れていった水死人らは眠りにつくだろう。ハリケーンによって大空高く投げ出された私は入江の藻草に取りつかれた船にいた。それが海防艦やハンザ都市を巡る船かどうかにかかわらず誰も私の骸を拾ってくれない。私は自由気ままに煙をくゆらし、紫の靄も乗せて、赤く染まった大空に壁の穴をあけた。そこには詩人の好きなジャムのような、太陽の苔や鼻汁がひっかかっている。

電光を発する星に彩られ、黒い海馬に護られて、板子のうえを私は走りぬけた。時は七月、光がめった打ちにするウルトラマリン(群青)の大空は燃え落ちた(パリ・コミューンの失敗)。五十里のかなたに猛り狂う怪獣が出現し、メールストローム(ノルウェー北部モスクン島海域の大渦)を起している。さすがの私もこれには戦いた。青海原を航行する私にはヨーロッパがなつかしい。

私は見た。星々の群島を。その上空は錯乱しているが航海者に開かれている。未来の生気たちよ。お前が眠り身を潜めるのはこのうちか、それとも幾千万の鳥たちのうちか。私は涙した。暁は胸をえぐるし、月はむごい、太陽は全て苦い。しびれるほどの愛に私は麻痺してしまった。竜骨は砕けよう、私は海に沈もう。

私はヨーロッパの冷たい森の池。芳しい夕間暮れにひとり悲しみに満ちた心でかぼそい舟を浮かべていたい。お波よ。私は綿を運ぶ船に乗り込むことも、戦いの船に乗ることも、恐ろしい囚人船に乗ることもできない。

ニューカレドニア島流刑者収容所跡 1875年の第3共和政成立後廃止  
柵から





## V 地獄の一季節 Une Saison en enfer ランボー（仏 1873年）

青土社「ランボー全詩集」湯浅博雄 訳 p198～

アルチュール・ランボー(1854～1891)は、ベルギーとの国境に近いシャルルヴィル出身。女手一つで育てられた5人兄姉妹の真ん中。学校では早熟の神童の異名をとっていたが、同時に、早期に反抗期をむかえる。それは母親がキリスト教道徳についてあまりに厳格だったことへの反発からと、言われている。その特色はこの作品においても色濃くでている。

### ① 悪い血

ランボーは「自分らは劣等種族ガリア人の末裔であり、野蛮で、偶像崇拜と流聖を平気でおこない、悪徳、怒り、淫乱、嘘と怠惰に染まっている」と呼ぶ。ぼくは、神に帰依することで救われる“良い血筋”の人間でもなければ、“新しい貴族”というべき科学や進歩を信奉することで劣等種族から抜け出せると錯覚している“近代主義者”でもない。つまり、いつまでたっても劣等種族で、この世は欺瞞に満ちている。

『いまぼくは呪われている、**祖国などにはぞっとする**。いちばんなのは、砂浜のうえで、深く酔いしれて眠ることだ。』 同 p202

『いっただれに仕えるのか。**どんな獣を崇めなければならないのか。どんな聖像を攻撃するのか。どんな心を打ち砕くのか。どんな嘘を保持しなければならぬのか——どんな血のなかを歩むのか。——むしろ正義に関わらぬよう気をつけること。**——きつい生活、ごく単純な愚鈍化、——干からびた拳で棺の蓋をあけ、坐り、息絶えること。そうすれば老衰もなく、危険もない、なにしろ恐怖はフランス的じゃないから。』 同 p202, 203

『ぼくは自分の分別のとおりではない。ぼくは言った、神と。救いの中に自由が欲しいのだ、ぼくは。ぼくは、どういやってそれを追求すればよいのか。浮薄な嗜好からは、ぼくは離脱した。ぼくは献身も神の愛も必要ない。感性豊かな心たちの世紀を、ぼくは惜しみはしない。蔑むにしても、愛を抱くにしても、各人はめいめいの道理を持っている。**ぼくとしては、良識というもののあの天使の梯子のてっぺんに、自分の席を取っておく。**』 同 p207

『ああ！ 両方の肺が焼けるようだ、こめかみがうなりを上げて鳴る！ **こんなに太陽が照っているのに、ぼくの眼のなかで夜が転がる。**——撃て！ ぼくを撃て！ ぼくは自殺するんだ！——こんなことにも慣れてゆくだろう。それがフランス的な人生というもの、名誉への細道というものなんだろう。』 同 p207,208

### ② 地獄の夜

ランボーは、11歳のときに聖体拝領の儀式をすましているが、長じるにつれてキリスト教徒たることから抜け、“異教徒”と堂々名乗るようになる。その反発は、もちろんキリスト教社会がもつ、「自分を圍繞し、自由を束縛し、抑圧する制度や体制への」反発であるとともに、そういうものを、いつのまにか内的に受容している自分自身に対する反発であった。

『やれやれ！ 生の時計はさっき止まってしまった。ぼくはもうこの世にはいない。——野原で注意をこらしていると、なんと多くの邪魔めいた現われがあることか——白衣をまとい、褐色の編み髪を垂らしてたっているイエスの姿を、角灯の明りが照し出していた——**ぼくは一切の神秘をあばいてやろう、——**』 同 p210

『世の中を懐かしむ気にはまずならない。好運にも、ぼくには苦痛はない。ぼくの人生は、熱にうかされた愚行に過ぎなかったということ、それは確かに悔やまれる。**なあに！ 考えられる限りのしかめ面をしてやろう。**』 同 p211

『怒りのためにぼくの地獄を、傲慢のためにぼくの地獄を持たねばならぬのかもしれない、——それに愛撫の地獄も。**地獄どもの合奏(コンサート)だ**。気怠さのあまり死にそうだ。墓場だ、蛆虫にこの身をまかせろんだ、ぞっとするほどの怖ろしさ！ 魔王よ、道化者め、おまえの魔力でぼくをとろけさせようというわけか。ぼくは要求する。要求するぞ、二又の槍の一撃を、火の一滴を。』 同 p211

### ③ 不可能なこと

ランボーは、とかく近代人は英知の実を目指そうとしているが、福音は去ってしまっているのに、かといって科学は早い効果を生むものでもないのに、その恩恵にあずかれないのだ。

『やれやれ！ この地上には、**ぼくら地獄落ちの子どもがもうたくさんというくらいいるもの**だ。ぼくが彼らの群れに入ってももうずいぶん長い時がたつ。みんな面識があるほどさ。——そしてお互いこうざりしているのだ。』 同 p231

『飲酒癖だ、煙草だ、無知だ、献身だ——こうしたこの一切は、あの原初の国、東方の英知の思想からはずいぶん遠く離れていないか？ こんないろいろの毒が生み出されるのなら、近代世界とはいっただいなんのためなんだ？』 同 p233

『**ぼくの精神よ、気をつけろ**。一刀両断の救済の策などありはしない。鍛錬しておけ！ ——ああ！ 科学とは、ぼくたちにとって十分なほど早くは動かない！ ——だが、ぼくの精神は眠っていることに気がつく。』 同 p234

# VI スラブ雑感

スラブ民族は、千有  
余年のキエウ公国およ  
びキプチャク・ハン後  
の新興モスクワ公国の  
二つを本流に、さらに  
現在の東欧諸国の領域  
にまたがって文化的・  
精神的をもっている。  
その宗教はギリシヤ正  
教を淵源に諸民族の文  
化や感覚とまざりあ  
い、今ではロシア正教  
と呼ばれている。両館  
ハリストス教会堂や東  
京神田のニコライ堂の  
妻から確かに西歐とは  
少し違って見える。だ  
が、今次のウクライナ  
危機から、この程度の  
印象どまりとしてい  
てはいけない、極東の私  
も今後の復興面で機力  
を厚くしたい、少しで  
もその地域のことを知  
っておきたいと思っ上  
うになった。

私はロシア正教のこ  
とは知らないが、聞き  
かじってきた歴史や文  
学からスラブの人たち  
の心象世界のことを考  
えてみたい。——スラ  
ブの大方は、地理的に  
みて、黒海に注ぐドネ  
ストル川東岸から始ま  
り、はるかシベリア、  
中央アジア北緯、モン  
ゴル、中国東北麓、沿  
海州にまで続くユーラ  
シアステップ(草原)  
が占めている。宗教分  
布では移殖で発生した  
キリスト教が、いまこ  
の地で一般的となっ  
ているが、それはあくま  
でも創始宗教としての

創始であって、民族の  
心の奥底に埋火のよう  
に燃び続けている自然宗  
教は何だろうかと考え  
たとき、スラブのそれ  
は「大地」ではないだ  
ろうか。それは人々の  
魂をときとき争かに持  
ち上げ、「母なる大地」  
の感覚を呼び起こし、  
宗教的信仰や信念に汲  
掘するかたちで、人の  
意思や行動を決定す  
る。たとえば次の場面  
がある——

①「罪と罰」(下スト  
エフスキー)では、主  
人公ラスコリニコフ  
は金貨と悪妻の殺人事  
件で真犯人は自分だと  
悪人ソーニヤに陥らし  
たとき、彼女は悲し  
く「早く、今すぐ行っ  
て、四つ辻に立って、  
身を屈めて、まずあな  
たが汚した大地に向か  
って援助しなさい。そ  
れから全世界に向っ  
て——「わたしは人を救  
うために来ました」そうす  
れば、神さまがまたあな  
たに生命を授けて下さ  
います。」(岩波文庫、  
中村白雲訳、Ⅲ124  
ページ)と諭した。

②「王様の耳はロバ  
の耳」(スラブ民謡)で  
は、王様の耳の秘密を  
知った床屋は拙言無用  
と命じられていてもそ  
れを喋りたくてしよ  
うがない。とうとうその  
苦しさに負けて「大地」  
に穴を掘り思いっきり  
喋った。やがて草原に  
風が吹くと草原から秘

密のささやき、唸り、  
叫び声がおこる。

③1981年、ロー  
マ法王ヨハネ・パウロ  
2世(ポーランド出身  
の来日時、法王は羽田  
空港でタラップを降り、  
要人と握手をする前に  
「大地」にひざまずき

## 寄稿 大地への信仰～スラブ民族の心～ ウクライナ戦争の深層を知る補助線 久井 勲 作家、元会社役員

が、彼女の深い心算が  
ら逃げられた。そのと  
き彼は自分の心を委そ  
うと聖書をそとるに読  
んでいてマタイ伝18章  
に行きついたので、  
豁然大悟した。「そう  
だ、これだけのことを  
のた、そして自分の  
ために独特の五つの戒  
めを課した。」(岩波文  
庫、中村白雲訳、下3  
88、393ページ)

トルストイは、もはや  
聖書の唯一絶対の解釈  
者たる正教会へ、幾分  
の付度もしなかつた。  
彼には教義の信仰より  
も「大地」の方がより  
大きな決定因子なの  
だ。この記述で彼は1  
901年、正教会から  
脱離されている。  
徳道にそれるが、ト  
ルストイの愛した外国  
人は仏人ロマン・ロー  
ランと日本の小西増太郎  
岡山・児島の堀田王、  
野崎武吉郎の秘密だ  
った。小西は師とも  
に、老子の「道徳経」  
を露語に共訳したり、  
師の著作を和訳したり  
で駐留相照らす関係に  
なっていた(トルスト  
イ著 至る道 小西  
増太郎訳、昭和2年  
刊、岡山県立図書館  
蔵)。トルストイはそ  
の小西に自分の愛用す  
る聖書を贈った。そこ  
には、トルストイが賛  
成できる箇所と疑問／  
反対する箇所が色鉛筆  
で明かされていた。疑  
問／反対は「母なる大

地」の心情からくるの  
だろう。  
④また「戦争と平和」  
(同上)では、ペズー  
ホフ伯爵のピエール  
は、ナポレオンのモス  
クワ攻撃から避難する  
際に仏兵に逮捕され、  
先に牢内にいたロシア  
の憲兵フランドン・カラ  
ターニフと知り合っ  
た。ピエールはそこで  
いままで経験したこと  
がないほどに純朴な彼  
の人格にふれ深い感銘  
をおぼえた。彼は村木  
の姿みで捕まっていた  
が、いわゆる目に「丁  
字もない人物で、敵も  
味方の意識もない、た  
だ大地の恵みに感謝す  
る姿勢を貫いている。  
「彼(カラターニフ)は  
人生が自分と密り合わ  
せたもの、ことに人間  
——だれか特定の人間  
ではなく、自分の目の  
前にいる人間——を愛  
し、ともにむつまじく  
生きていた。彼は自分  
の小夫を愛し、同僚、  
(敵方)フランス人を  
愛し、自分の隣のパエ  
ールを愛していた。」  
(岩波文庫、藤沼龍樹訳、  
V379ページ) 大地  
に生きる人間は、こう  
であるはずだ、とトル  
ストイは言っている。

ウクライナの鬼哭歌  
歌たるありさまに、良  
識あるスラブ人はどう  
思うだろうか。いつか  
平和の日に本来のスラ  
ブ人の魂にふれてみた  
い。